

教員の書籍紹介



熊本 博之教授

沖縄が日本に復帰して50年となる2022年に、無作為に抽出した沖縄の有権者3800人に調査票を郵送し、意識調査を行いました。その分析結果を、アイデンティティ、階層、若者、政治、辺野古移設というテーマごとに分析した結果が本書です。

私が担当した辺野古移設では、移設に反対する県民が多数派ではありませんが、若い世代では3人に1人が「どちらともいえない」を選んでいました。また、普天間基地を辺野古に移設しても沖縄の基地負担の軽減にはならないと思っているにもかかわらず、移設には賛成だと答えたり、判断に迷って「どちらともいえない」と答えたりする人が3割いることもわかりました。

このように米軍基地をめぐる沖縄の世論は複雑です。「賛成/反対」ときれいに分けられるものではありません。本書ではその複雑さを数字で描きだしてみました。他の章も興味深い結果がたくさん出ています。ぜひ手に取って読んでみてください。沖縄の見え方が変わりますよ。



熊本博之・田辺俊介編著 2025年 筑摩書房
『復帰50年の沖縄世論』

MESSAGE

明星大学の学生に贈る言葉

下平好博

「選ばれてあることの恍惚と不安とふたつ我にあり」、これは小説家の太宰治が『葉』という短編小説の冒頭で引用した詩人ベルレーヌの言葉である。この言葉を自分は、研究者になって以来ずっと大切にしてきたような気がする。大学はかつて、一部の特権階級しか通うことができぬ最高学府であった。いまは高卒者の約6割が大学に進学するとされているが、にもかかわらず、最高学府であることに変わりはない。エリートと大衆とを分ける境界線は、「選ばれてあることの恍惚と不安」があるかないかである。決して大学のネームバリューや偏差値ではない。どうか皆さん、このことを忘れずに引き続き勉学に励んでほしい。

下平先生最終ご講義



2026.Mar
Vol. 37

今回は/
卒業生
特集

JiN-SHA YELL



明星大学 人文学部人間社会学科
ニュースレター

DEPARTMENT OF SOCIOLOGY AND HUMAN WELFARE

人間社会学科、略して「ジンシャ」。ジンシャに関わるすべての人にエール(声援)を送ります!

江澤 慶幸 さん (竹峰ゼミ)

自由に選び、出会い育つ ——挑戦の4年間

人生の中で最も自由で貴重な時間、これが大学生活だったと実感しています。言われたことをやる勉強をするだけでなく、アルバイトや教職、ゼミ、旅行など、すべてを自分で選択し、主体的に時間を使うことができました。

教職活動では、将来教員として社会に貢献したいという思いから、学内外で教育に関わる経験を積みました。授業や教育実習を通じて、仲間や生徒と関わる中でコ

ミュニケーション力や計画力を養うことができ、教育の現場に必要な視点や柔軟な対応力を学ぶことができました。

ゼミでは「服が捨てられ続ける世界で—持続可能な社会に向けたZ世代の『葛藤』というテーマで卒業論文を完成させました。ファッション産業の大量生産・大量廃棄の背景を分析し、Z世代が環境意識と消費行動の間で葛藤する現状を明らかにしました。この経験を通じ、社会課題を具体的に考え、解決策を模索する力を身につけることができました。

大学生活での幅広い学びと多くの出会いは、自分の成長と選択を豊かにしてくれました。これから社会人として新しい環境に進む中でも、学んだことを活かし、主体的に努力を続けていきたいです。支えてくださったすべての方々に感謝します。

母校の中学校で教育実習に取り組む筆者



ゼミの卒業論発表会で報告する筆者

木下 知哉 さん (天野ゼミ)

メタバースで切り拓いた、学びと働き方

実際に販売予定の3D作品



私が学生時代に力を入れてきたことは、メタバースを活用した3Dモデリングによる創作活動です。私は高校時代から祖母の介護を担っていたため、一般的なアルバイトを行うことができませんでした。大学入学後にメタバースと出会い、Blenderを用いた3Dモデリングを独学で学び、メタバース向け衣装の制作・販売を始めました。

現在は、収入によって生計を立てられている時期もありますが、その収入は不安定であるため、作品のクオリティ向上や販売ベースの改善を意識しながら、継続的に制作に取り組んできました。今後は衣装制作にとどまらず、アバター本体や小物制作にも領域を広げ、制

作技術の幅をさらに高めていきたいと考えています。

当初は就職を志していましたが、将来的な両親の介護も見据え、リモートで働ける環境を模索する中で、さまざまな困難にも直面しました。そこで私は、3Dモデルの販売を継続しながらポートフォリオを充実させ、技術力と実績の双方を高めていく道を選びました。今後は、これまで培ってきた制作経験を生かし、3Dモデル制作の技術を社会や企業活動の中で価値として提供できる仕事に就きたいと考えています

北島 広大 さん (元治ゼミ)

教職課程で学んだ「人と向き合う姿勢」

大学時代に最も力を入れたことは、教職課程を通して「人と向き合う姿勢」を学び、実践し続けたことです。人間社会学科では、社会学・心理学・教育学を横断的に学び、人の行動や背景を多角的に捉える視点を養ってきました。その中で、大変だったことは、人間社会学科の科目だけでなく教職の科目もとらなくてはならず、授業の組み方が限定されてしまう事でした。教職課程における授業では指導案作成や模擬授業を重ね、生徒の理解度や反応を想定しながら授業を構成する難しさを学びました。特に意識したのは、「正しく教える」ことよりも、「相手に伝わる形にする」ことです。一方的な説明ではなく、生徒の

立場に立ち、どこでつまづくのか、どの言葉なら届くのかを考える姿勢を大切にできました。教育学部ではなく人間社会学科で学んだ事により、社会の課題や興味関心について気づくことができ、教育実習や進路選択にも役立ったと感じています。

また、教育実習を通して、教室には学力だけでなく、家庭環境や性格、特性など多様な背景を持つ生徒がいることを実感しました。その経験から、一人ひとりを理解しようとする姿勢と、安易に決めつけないことの重要性を学びました。

大学生活全体を通して、人と関わる中で生じる葛藤や難しさなどの課題から目を背けず、学問と実践の両面から向き合い続けたことが、4年間の自分の大きな成長と感じています。この経験は、将来どのような立場であっても、人を支える仕事に活かせると考えています。

江口 宗一郎 さん (荒井ゼミ)

変わる人社、変わらない人社

私にとって、学生生活で忘れられない言葉があります。入学して早々に行われたガイダンスで当時の学科教務の教授からいただいた「大学生は、人に頼ろうがさせようがすべて自己責任だから頑張りなさい」という一言です。この一言は2022年度入学生にとって記憶にある学生も多いと思います。

以後、私はこの言葉を胸に授業や研究に取り組みました。特に2年次からはチューデント・アシスタント(SA)という責任ある立場を拝命し活動して参りました。1年生へのアシスタントやオープンキャンパスでの説明、交流会の企画・運営をSAとして行いました。そして3年次からは、ゼミ長という責任ある立場を拝命し、教育社会学のゼミとして実践的な学びを提供したい

思いから運動会や体験的なゼミ合宿の企画・運営をしました。この4年間、ありがたいことに多くの学生に慕っていただきました。そして振り返ると、この人間社会学科の学生に夢と目標を持ってもらいたい、その一心で生活してきました。そのため常に「責任」の2文字が頭のなかにありました。

しかし、この言葉の重みが私自身を大きく成長させてくれたと思います。卒業後は、後輩への夢と目標の集大成として大学院に進学します。人間社会学科を卒業したことを誇りに持ち、弛みなく研究に励んでいきます。指導教員の荒井先生をはじめ、どんな時も温かい眼差しで応援してくださった先生方や先輩、同期、後輩が責任感を持って支えてくださったからです。心より深く感謝を申し上げます。

一年生の後輩たち

SA活動にて

ゼミ運動会

交流会にて

篠原 佑斗 さん (荒井ゼミ)

仲間とともに

人間社会学科で過ごした4年間は、私にとってかけがえのない時間です。

友人や先生方に恵まれ、学業、部活動、学童でのアルバイト、そのすべてに真剣に向き合えた日々は、現在の私を形づくる大切な経験となっています。

体育会男子送球部では、一部昇格と全日本インカレ出場を目標に、仲間とともに日々練習に励んできました。大学3年次には主将を任せられ、責任の重さに悩むこともありましたが、入れ替え戦や東日本インカレの舞台に立てた経験は、仲間とともに困難に立ち向かう強さを私に与えてくれました。

後輩SAとつとめた学校案内

荒井ゼミではゼミ長を務め、SAとして後輩の学びを支えながら、学年を越えたつながりを大切にしてきました。地方出身の仲間たちと後輩の成長とともに喜び、卒業論文提出前には早朝二時までファミレスや自宅で机を並べた時間は、人と支え合うことの尊さを深く実感する日々でもありました。

また、教職課程を通じて出会った仲間との時間は、学びの場にとどまらず、日常の中でも互いを励まし合える大切な関係となりました。

明星大学で出会った人、そして積み重ねてきた経験のすべてが、これからの私を支える原点です。この春から実業団選手として新たな一歩を踏み出しますが、ここで得た学びと感謝を胸に、これからも仲間とともに全力で挑戦し続けていきたいと思っています。

SAをつとめた1年生ゼミ

男子送球部の仲間と

ゼミの仲間と

大嶋 優海 さん (荒井ゼミ)

ゼミと社会調査実習からの学び

人間社会学科での4年間は、仲間とともに学び、支え合いながら成長した時間でした。

荒井ゼミではゼミ長として、SAとしての活動や行事の立案・運営に携わりました。仲間と意見を交わし、計画し、実行し、振り返る経験を通して、PDCAの重要性を実感しました。イベントで経理を任せられたことは、信用金庫への就職を志すきっかけにもなりました。また、ゼミ長の仲間たちとは教職課程が同じこともあり、課題や授業に追われながらも、自然と支え合う関係が生まれていきました。

社会調査実習では、鶴沢先生のもと、ポップからクラフトビールをつくる取り組みに挑戦しました。0から1を生み出す難しさや、社会で必要とされる関係性の築き方を、地域の現場での実践を通して学ばせていただくことができました。

栃木県から上京し、期待と不安の中で始まった大学生活でしたが、4年間で重ねてきた語り尽くせないほど多くの経験は、楽しい思い出とともに、私に多くの学びを与えてくれました。一つひとつを思い出すたびに、感謝の気持ちとともに胸がいっぱいになります。

誰よりも多くの時間をともに歩んだ同期、尊敬できる先輩、頼もしい後輩、荒井先生・鶴沢先生をはじめとする恩師の方々など、かけがえのない人たちに会うことができた自分は、本当に幸せ者だと感じています。

中学時代の恩師の「どんな困難でも逃げずに挑戦しろ」という言葉を胸に歩んだ4年間。高校卒業時の自分に、心配することはない、きっと楽しく刺激的な大学生活になるよと伝えたいです！

地元栃木にゼミ合宿

ゼミのイベントにて

同期の仲間と

短編映画を制作

松本 美卯子 さん (寺田ゼミ)

わたしの人生を変えた四年間は一瞬だった

やりたいことをぜんぶやった大学生活の四年は一瞬でした。

わたしは虐待サバイバー当事者で、自身の経験を文章にして表現することが長年の目標でした。その目標に少しでも寄りついたら、この四年を通して人間社会学科で学んできたからです。たった四年では自身の経験や、他の虐待サバイバー当事者の経験を「研究」として昇華しきれなかったため、悩みに悩み、学科の先生方にたくさん助けをもらいながら、他大学大学院に進学することが決まりました。嫌なことも良いこともたくさん刺激を受け、考え方は変わり、成長し続けた四年間でした。

刺激の一つに、竹峰先生と先輩方、他大学の学生と行ったマーシャル諸島があります。日野市役所の平和推進のための研究という理由で行ったマーシャル諸島は初海外でしたが、水が止まりペットボトル生活をおくるなど、忘れられない経験ができました。決して楽ではなかった旅を共にした学生たちが今では最高の友達になり、年末年始には必ず集まって下手なダンスを踊るなどしています。

また、部活動では短編映画を二作、制作し、東京学生映画祭に出展しました。一作目の「ルリビタキ」では監督、脚本、出演を務め、卒業論文や今後の研究のヒントにもなる大事な一作を形に残すことができました。

正直、美大に行っていたらどんな人生だっただろう、と今でも考えます。ですが、この四年間のこの場所じゃないと出会えなかった大切な友人、先生方に会えたことは、確実にわたしの人生の風向きを大きく変えたと感じています。まだまだやりたいことがたくさんあるので、生きます！



マーシャル諸島にて

中村 未来 さん (熊本ゼミ)

人とのつながりが成長させてくれた

私にとって、様々な学部の学生と関わる機会を得られた「星友祭実行委員会」での活動は、大学生活を充実させながら、人と関わる楽しさや大変さを学ぶことができた、大事な経験でした。

3年生の時には副委員長を務めさせていただきました。全体の運営だけでなく、下級生の進捗状況を確認しながら、困っていることがあれば声をかけ、作業が滞らないようサポートする役割を担っていました。



第59代目三役幹部の仲間と



大好きな先輩と同期と一緒に

お笑いライブMCに挑戦！！



星友祭は、仲間と一緒に協働し、活動しなければなりません。そのため、副委員長には特に、周囲を見ながら行動する力や協働力、考える力、コミュニケーション力が求められます。人間社会学科の授業ではグループワークやフィールドワークの活動が多く、他者と協働しながら主体的に行動することや、自分の意見を伝える力などが自然に身に着きます。この学びが、星友祭実行委員会においても、下級生を支える場面や周りを見て考えながら行動する際に活かされたと思っています。

もともと私は、自分の意見を伝えることに苦手意識がありました。学科での学びと委員会での活動が、そんな自分を成長させてくれたと考えています。

『視点や切り口が面白かった』竹峰ゼミ卒業論文公開報告会

「問いと研究対象の取り上げ方に好感を持ちました。ファッションの力と平和への接続、東京における被爆者の運動と世代を超えた継承、発達障害を可視化するカフェの空間の意義の吟味、どれも大変興味深いご報告でした。」(参加者からの感想)。

2026年1月25日、竹峰ゼミ卒業論文公開発表会をハイブリット形式で開催しました。「興味を持ってくれてうれしかった。何度も足を運んでくれた」と、フィールドワーク先の方にも参加を頂き、温かい言葉をいただきました。

ゼミの卒業生も顔を出してくれました。「今年もゼミ生のみなさんがいろんなテーマに取り組みされていて、非常に面白く、勉強になりました。左波さんの卒論に登場するTENBOの取り組みが非常に面白かったです。障がい者のファッションだけでなく、平和とも結びついていて、今までにない視点だなと感じました。」

Zoom上の一般参加者から、「水野さんの発表は、広島に住んでいてもなかなか知ることのない、広島・長崎以外で活動する江戸川区の被爆者団体の活動や追悼碑が建立された経緯を知ることができ興味深かった」との感想が寄せられました。「門田さんが発表された、現代の寺院の新たな取り組み、感動するお葬式の提供やアマダステーションの開設について興味深くお聞きしました。」荒井先生もかけつけていただき、「江澤さんを中心にして、みんなで集まって助け合い、他のゼミ生にも教えている様子が印象深かった」などと声をかけていただきました。

3年生のゼミ生は、積極的に質問をしました。「視点や切り口が異なり、面白かった。来年度の卒論作成の参考としたい」、「来年は自分達の番で参考になった場面もあれば、ちゃんとやらなきゃと焦った場面もあった」などの感想を寄せました。「卒論と聞くと堅苦しいものを思い浮かべていたが、身近なことを取り上げている人もいて、卒論に対するイメージが変わった」との感想も2年生から寄せられました。



『ノルマル17歳。』 近藤実奈子さん・関本美月さん 3年
 上映会で広がった対話
 ——大学から地域へ



2025年10月に、「ドキュメンタリー実習」と「フィールドワーク実習」が合同で、ADHDの女子高生たちが生きづらさを描いた映画「ノルマル17歳。- 私たちはADHD-」の上映会を学内で

実施しました。この上映会は、発達障がいへの理解を深め、支援のあり方やアライについて知ってもらう機会として企画し、25名が参加しました。当日は北宗羽介監督にもご来場いただき、上映後に質疑応答の時間を設けました。質疑応答では多くの質問が寄せられましたが、参加者同士が感想や意見を共有する場を十分に確保することができないという課題も残りました。

そこで、上映後にさらに交流の場を設けたいと考え、12月に日野市南平にある『本屋とキッチンよりまし堂』で、改めて上映会を実施しました。「ドキュメンタリー実習」履修者の有志が企画・運営し、当日は地域住民を中心に15名が参加しました。上映後は、ADHDなどの障がいに対して当事者の気持ちや、周囲の接し方について話し合いました。地域の方々と巻き込むイベントを企画・運営することは初めての経験だったので、最初は不安もありましたが、当日は意見交換が活発に行われ、想像以上に充実したイベントになりました。

上映会の開催にあたり、北監督、ならびに「よりまし堂」の皆様にご協力いただきました。心から感謝申し上げます。



春は「多摩の明星」、藤井日菜乃さん 3年
 秋は「多摩の明星～蜜星～」
 せいせきビールまつりで完売！

社会調査実習（フィールドワーク実習） 鶴沢クラスでは、クラフトビールづくりに関して、ホップ育成から材料選びや味の調整、商品名やラベルデザインなど、企画から販売までの全工程に関わり、チームでアイデアを出しながら取り組みました。



2025年10月に開催されたせいせき秋のビールまつりでは、オリジナル瓶ビールが大好評！イベント3日目には完売し、春に続き秋も「一番投票されたで賞」を受賞することができました。ビールの販売中に来場者の反応を見ることで、それまでの努力が形になる達成感も得られました。



さらにビールの副原料として使用したブルーベリーは、自分たちで日野の農園を探しブルーベリー狩りを行うなど、準備から工夫を重ねました。

また、最終報告書の作成に向けて各グループに分かれ、日本各地のクラフトビールと地域活性化など、自らの関心に従いインタビューや調査を行い、執筆をしたことで、企画や調査の面白さ、成果を出すことのやりがいや喜びを実感しました。すべての工程に携わりながら挑戦を重ねたことで、クラフトビールの奥深さを存分に味わえた実習でした。



就職率
100%

『ようこそ先輩』プロジェクト・キャリア支援報告

富樫学長もお越しくださいました！



人社では2023年度より学科独自のキャリア支援制度を構築し、2023年度・2024年度と就職率100%を達成しました。その強みは学科専属のキャリアカウンセラーさんが3人おられ、週3回、学科学生は学年を問わず（卒業生も！）、進路相談から就活の書類作成・面接指導等のカウンセリングを受けられ、学年に応じた対応（前後期3年ゼミ訪問等）などを実施して下さっていることです。また、目玉のイベントとして今年度も11月11日に「ようこそ先輩プロジェクト」を実施しました。2・3年のゼミの時間を使った「4年生就活トーク・座談会」を今年度は「MEISEI HUB」で実施、富樫学長もいらして下さり、とてもよい取り組みとの言葉をいただきました。続いて場所を移し、食堂で20名ほどの卒業生をお招きして軽食をとりつつ、在校生が自由にお話を伺う交流会を実施、同窓会社会学会支部長であられる後藤信夫さんにもいらしていただきました。人社や後輩たちを思う卒業生と「いつかは自分も先輩としてこの場に」と憧れる在校生、見守る教職員が紡ぐ和やかな雰囲気人社の魅力が詰まっているように思い、感慨深いものがありました。

（鶴沢由美子）

4年生の就活体験談



4年生就活トークと座談会



交流会



台湾での学会発表を通じて得たもの

フィールドワークにて



Arai
荒井ゼミ



高雄駅にて

私たちは2025年11月8日、台湾・高雄大学で開催されたカルチュラル・スタディーズ学会（Association for Cultural Typhoon）において学会発表を行いました。研究題目は『つながりっぱなしの日常』を生きる若者のジレンマ—日本人BeRealユーザーのエスノグラフィー（The Dilemma of Youth Living in “Always-On” Intimate Communities: An Ethnography of Japanese BeReal Users）です。ゼミで取り組んできた共同研究を海外の学会で発表することとなり、大きな期待と緊張の中で当日を迎えました。

身近な若者文化から社会を考える

研究テーマは、若者の間で利用が広がるSNS「BeReal」です。私たちは2年次から、BeRealが若者にとってどのような意味を持ち、日常の中でどのように使われているのかに着目し、研究を進めてきました。調査では、インタビュー調査に加え、利用状況や投稿時の感情を記録する日記調査を実施しました。一人ひとりが役割を担い、記録、インタビュー、デザイン制作、映像編集など、それぞれの得意分野を生かして研究をまとめていきました。語学力をもつメンバーは、翻訳ソフトや文章校正ソフトを活用し、海外論文の読解や多言語資料の作成にも取り組みました。

分析の結果、SNSには人とつながる安心感がある一方で、常につながり続けることによる疲れやプレッシャーも存在することが明らかになりました。特に日本では海外とは異なり、自然体を共有するアプリであるBeRealにおいても「映え」を意識してしまう傾向が見られ、この特徴は海外研究者との質疑応答を通して、より明確に認識することができました。

映えるまで
何回も撮り
直してしまう



様々な国の研究者（英語と韓国語で発表中）



三か国語に
訳したポスター

現地では、学部生が海外で研究発表に挑戦できる環境は、海外から見ても決して当たり前ではないと教えていただき、自分たちが恵まれた学習環境にあることをあらためて実感しました。応援して送り出してくれた親、大学での手厚い指導、充実した研究機材、宿泊費補助などのご支援に、心から感謝しています。

楽しい夜市



仲間とともに得たもの

夜市での時間や共同生活、国際学会をやり遂げた経験を通して、ゼミの仲間との絆も深まりました。なにより、計画を立て、考え続け、仲間と協力して真剣に取り組めば、自分が想像もできないようなこと、不可能だと思っていたことも可能にできるという、大きな自信につながりました。支えてくださった方々と環境に感謝しつつ、この自信を胸に、今後の人生に活かしてまいりたいと思います。



学会発表
を終えて



3年
遠藤優輝さん

どれも美味しい！

